

# 棚田学会通信

第31号 2010年6月18日  
 発行/棚田学会  
 〒183-8509 東京都府中市幸町3-5-8  
 (東京農工大学農学部千賀研究室内)  
 TEL:042-367-5758 FAX:042-336-1299



兵庫県多可町「岩座神（いさりがみ）の棚田」（写真提供：多可町役場）

◆巻頭言	2
“わが町の誇り、岩座神の棚田” —兵庫県多可町—	兵庫県多可町長 戸田 善規
◆会員通信	3
棚田サミットを迎える松崎町石部の棚田	静岡県松崎町役場 山本 公
“いま、棚田検定の理由（わけ）！”	株式会社ビジョンプラス 毛利 良之
第20回現地見学会・研究会「岡山県吉備高原の棚田」に参加して	
	岐阜県中津川市 清藤奈津子
	山口県光市 守末 道代
心のふるさと 棚田里山展	棚田学会副会長・新生ふるきやら代表 石塚 克彦
◆日本の棚田百選紹介	8
岡山県久米南町の「北庄の棚田」	
	岡山県久米南町 北庄中央棚田天然米生産組合組合長 西河 明夫
◆官庁ニュース	9
新たな「食料・農業・農村基本計画」について	
	（独）国際農林水産業研究センター（JIRCAS）研究戦略調査室 山岡 和純
◆書籍紹介	10
宇根 豊著「風景は百姓仕事がつくる」	棚田学会理事 安井 一臣
◆棚田写真集	12

事務局ニュース

● 2010年度棚田学会大会 ●事務局からのお知らせ・お願い 編集後記

## 巻頭言

### “わが町の誇り、岩座神の棚田”

—兵庫県多可町—

兵庫県多可町長 戸田 善規

#### ■多可町の概要

多可町は、平成17年11月1日、多可郡内3町（中町・加美町・八千代町）の合併により誕生しました。兵庫県の内陸部に位置し、周囲を中国山脈の山々に囲まれた多自然居住の町です。町の人口は24,304人（平成17年国勢調査）、東西13km、南北30km、総面積185km<sup>2</sup>で、直線距離で神戸・姫路まで約45km、大阪まで約70kmの所に位置します。

所要時間は新幹線・新神戸駅まで70分、姫路駅まで60分、大阪空港まで70分と比較的都市部に近く、都市農村交流施策の展開に当たっては最適地といえます。全国でも先駆的に滞在型市民農園（フロイデン八千代など4カ所）を整備し、都市住民を対象とした農林業体験ツアーを実施するなど、二地域居住や多可町への定住を促進しています。

主産業は農林業と地場産業の播州織（先染織物）ですが、産業構造の転換を進めるとともに新規企業の誘致による雇用確保と活力向上が課題となっています。

多可町は、3つの発祥の町として知られています。酒米の最高峰「山田錦」、7世紀後半から受け継がれる手漉き和紙「杉原紙」、そして超高齢化社会を迎えて、その精神を受け継ぎたい「敬老の日」、この3つの発祥のまちなのです。

#### ■岩座神の棚田と地区の取り組み

多可町には、西日本一の石垣美を誇る岩座神（いさがみ）の棚田があります。「日本の棚田百選」にも選ばれており、熱心な取り組みの地区として名を馳せています。岩座神の棚田は今から約700年前に築かれたといわれており、石垣の上部が特に急傾斜になっている「寺こう配」の石垣です。21戸の住居が棚田の農村景観のなかにうまく溶け込み、まさに日本の原風景と呼ぶにふさわしい所です。棚田を巡るうちに、石垣擁壁のほぼ中央に造られた棚状の段や、40～50センチの間隔で壁面から突き出た飛び石に気づきます。これは、壁面の草刈りや他の農作業のために使う「にんじゅう」と呼ばれる足場です。

同地区は標高300～400メートルに位置し、地区の総面積は約340畝。そのうち農地面積は11.8畝で、田んぼの枚数は334枚です。平均耕作面積は59坪と零細で、1筆当たりの平均面積は3.5坪。石垣の高さ

は最大で5.35m、平均で2.35mとなっています。かつて460筆、18畝あった農地も耕作放棄が進み、だんだん山が里のほうへ下りてきましたが、今では農家が協力し、耕作放棄田はほとんどありません。地区の高齢化率は約40%で、高齢者夫婦世帯が多くあります。しかし、40～50代のメンバーも豊富で、村の中心的な役割を担っています。

地区では、平成7年から本格的に棚田保全の取り組みを開始しました。まず棚田でソバと畑ワサビの試験栽培を始め、景観形成作物として棚田の石垣にマンネングサを植えました。ソバについては年々栽培面積を増やしていき、特産の「いさがみソバ」を商品化。ワサビについても商品化に成功し、「葉わさび漬け」として道の駅などで販売しています。またマンネングサについては、神戸大学などの協力を得て、学生ボランティアにより毎年植え付けています。

平成8年には21戸の農家全戸で「岩座神棚田保存会」をつくり、「棚田オーナー制度」の取り組みを開始しました。オーナー制度は平成9年の米づくりから始め、いま14年目に入っています。田植え、草引き、草刈り、かかしづくり、かかしコンテスト、稲刈り、棚田コンサート、脱穀、わら細工教室、ソバ打ち大会など数々のイベントを盛り込みながら交流事業を展開。この事業によって地区住民のふれあいが生まれ、地域に対する誇りも芽生えたといえます。

これまで13年間、地区がいろいろと取り組みをされてきたなかで、景観保全に明るい希望が見えてきました。住民のふれあいも生まれ和気が生まれた、交流の糸口がみつかり、村に活気が戻った等々の成果が上がりました。都市部のオーナーの皆さんからは、この地域のすばらしさを逆に教えられ、大きなものを得たように思います。平成10年には岩座神地区が「豊かな村づくり全国表彰」を受賞、また11年には兵庫県条例では初めて農村景観として景観形成地区の指定も受けました。一番大きなことは、自分たちの村は自分たちで守るという意識がみんなのなかに育ったことです。岩座神地区の画期的な取り組みは、他の地域にも大きな影響を及ぼしています。

#### ■多くの可能性を秘めた町

岩座神地区以外にも、多可町ではそれぞれの集落でむらづくり事業に取り組んでいただいております。農業振興や地域活性化に向けた様々な事業を展開しています。市部に比して多可町は人口や面積においては小さいかもしれませんが、その名の如く、「多」くの「可」能性を秘めた「町」です。

数多くの地域特性や地域資源を多可町のなかでさら



に昇華させ、町の財産（心の誇り）とし、住民全員がその誉れを共有できたとき、小さな多可町は「天たかく 元気ひろがる 美しいまち 多可」として全国に向かって確実に輝きを放つことができると信じています。

## 会員通信

### 棚田サミットを迎える 松崎町石部の棚田

静岡県松崎町役場企画観光課 山本 公

晴天に恵まれた5月15日（土）・16日（日）の両日、富士山と南アルプスを望む静岡県松崎町石部の棚田（石部赤根田村百笑の里）で、東京都、神奈川県、静岡県内などから集まった棚田オーナーと地区、関係者の皆さん770名余りで田植え祭が行われました。参加者は、指導者の手ほどきを受け、用意された竹の目印に従って、列を揃えながら手際良く苗を植え付けました。また、地区の女性会が用意したお赤飯やおむすびも振る舞われ、棚田での一時を楽しく過ごしました。

このように現在、農作業を通じて都市との交流が行われている石部の棚田が築かれたのは、江戸時代にさかのぼります。文政年間の山津波による崩壊、その後20年間、年貢が免除され復田されたと伝えられている先人の努力や苦勞が偲ばれる石積みの棚田で、かつては地区内に18haもありました。しかしながら、減反政策や過疎・高齢化、産業構造の変化により、地域を取り巻く環境が変化し、10年ほど前にはほとんどが耕作放棄され、原野化していました。

こうしたなか、先人から築いた棚田を地域の宝として蘇らせ、地域の活力を取り戻そうと平成12年に地区住民やボランティア、総勢300名が、100日をかけ、雑木、雑草を刈り取り、4haの田んぼに輝きが戻りました。平成14年には、静岡県内で初となる棚田オーナー制度を導入し、平成18年からは静岡県の「一社一村しずおか運動」により、企業や大学などの保全活動への協力が生まれました。また、地元高等学校の棚田での活動、100組以上の棚田オーナー、学生ボランティアによる保全活動が続けられています。

棚田で収穫された黒米・赤米を使った商品開発も行われ、一番人気の焼酎をはじめうどん、饅頭、パンなどが商品化され棚田ブランドとして流通してい

ます。なお、焼酎の売り上げの一部は保全資金として、寄付されています。

多くの人たちが苦勞して復元し、保全活動が続く棚田も10年を経過しましたが、全国の農山漁村が同様に抱える高齢化や担い手不足の問題は依然残り、持続可能な棚田保全の方策が求められています。

こうしたなか、今秋10月22日（金）・23日（土）に松崎町で開催される「第16回全国棚田（千枚田）サミット」（主催：全国棚田（千枚田）連絡協議会）では、全国の棚田を有する市町村、保全団体が一堂に会し、意見交換や交流を通して課題解決に取り組みます。今回のサミットでは、「棚田が結ぶ、ふるさとの絆 ～みんなで創ろう！百笑の里～」をテーマに、全国各地の参加者にメッセージを発信します。

テーマの中の「結ぶ」には、昔から近所や親せきなどで、互いに労働力を提供し合い、協力して農作業を行う「結い（ゆい）」という相互扶助の精神や地域のつながりを再構築したいという思いが込められています。テーマを通して、棚田を守り、育てていく意義を多くの皆さんが認識し、新たな結いやその心・絆を深め、「百笑の里」に込められた棚田に携わる人たち皆に笑顔が生まれる里づくりを提唱していきたいと考えています。

サミット初日には、開会式に引き続き、川勝平太静岡県知事による基調講演、地域の事例発表、また、棚田保全、生態系保全、教育連携、農商工連携・観光連携をキーワードとした4つの分科会や交流会が開催されます。交流会では郷土芸能や郷土料理などで楽しみいただきます。翌日の現地見学会では、昔ながらの手作業で耕作が行われている、全国でも貴重な棚田をご覧ください。

現在、町ではサミット実行委員会を組織して、松崎ならではのサミットを開催すべく準備を進めておりますので、是非とも「富士山と南アルプスを望む石部の棚田」を多くの方にご覧いただきたいの皆様のお越しを心よりお待ちしております。



棚田オーナーの田植え（写真：松崎町役場）

## 「いま、棚田検定の理由(わけ)！」

株式会社ビジョンプラス 毛利 良之

「戦後、仲間と一生懸命復田をしてきました。おかげさまで棚田オーナー制度も定着し、一定の収益を得られるようになりました。だけど、もうここまです。私たち、棚田保全会のメンバーも皆70代。これからのことが心配です。」

と静岡県石部地区棚田保全推進委員会会長の高橋さんという。

「毛利さん。空き家の手配もするから、早く会社やめて、こっちに来ないかの。となりの田んぼ七反歩も去年から空いているよ。」と、新潟県十日町市松代(まつだい)の棚田生産者村松さんという。

先日の毎日新聞の記事によると、長野県姨捨の棚田では人手不足で、ケアしなければならぬ棚田オーナーの人数を絞らざるを得ない状況だという。

日本の棚田は、一体どこへ行ってしまおうのだろう。元来、厳しい地形的制約から発生した棚田。そしてそれを維持する共同体の存在によって、深く人々の土地の記憶として受け継がれてきた保全の姿勢。しかし効率重視のグローバリゼーションの流れの中で、棚田での米生産の必要性必然性はどんどん薄れ、後継者不足による尻すぼみ状況となっている。なくしてはいけないものという漠然とした認識はあるものの、保全活動は一般化しない。オーナー制による活動も、日常の保全作業には機能しない。

### いま、なんで棚田を守るのか。

労働集約型非効率低収益性事業である棚田生産事業に未来はあるのだろうか。所詮棚田は人工物。ほおっておけば、元の自然に戻るだけ。何が悪いという議論もあるのかもしれない。

しかしながら、ここで考えねばならないのは、棚田に対する視点の転換・価値の見直しである。

棚田を訪れたときやその風景写真に触れたとき、ひとは、なんともいえない、奥底からくるそこはかとない癒しを感じる。

それはもはや理屈ではなく、現代日本人に埋め込まれている原風景への感性の反応なのではないだろうか。

ここに、現代風の棚田の存在と再生のヒントがあるかもしれない。

いわば、旧来の生産現場としての棚田から、日本人のこころの情景提供装置への機能変化である。

現状の保全活動は、旧来の生産現場という視点・価値観から、即効的には就農人口の確保ということ

で語られる。しかし残念ながら、役務に比して異様に低い収益性、地域・職域以外(外部世界)とのコミュニケーションの欠如(閉鎖的人間関係)、天候に依存する不安定な事業基盤などとそれに由来する様々な要素から、後継者となるべき子供は外部世界に出て行き、外部からの流入は、長続きしない。

一方、保全活動をこころの情景提供装置の操作・メンテナンスという観点から見るとすれば、若者の歓心を十分に得られるのではないだろうか。

景観協定や世界遺産への登録などで、多くの人を呼び込み、町おこしを達成している事例は国内にあまたあり、また原宿などの都心部や茅ヶ崎海岸などでの無報酬の清掃事業への若者の参加などの事例もある。

ポイントは、棚田が日本人のこころの原風景を提供できるパワーを持っていること、それが絶滅の危機に瀕していること、そしてその保全が生産者という立場に立たなくとも十分に行えるという情報をひろく、あまねく、ただしく、迅速にこころある人々に伝えるということである。

そのためには、棚田とは何か、いかにして作られ守り伝えられてきたのかを学習する機会が必要である。そう思いいたして今般始めるのが棚田検定。

そのタイミングは、早くも遅くもなく、若者の間に農業ブームが巻き起こり始めている今において他にない。



石部地区棚田保全推進委員会会長の高橋さん



新潟県十日町市松代の棚田生産者村松さん

第20回現地見学会・研究会  
「岡山県吉備高原の棚田」に参加して(1)

岐阜県中津川市 清藤 奈津子

初めて研究会に参加させていただいた。岡山県では早くから県の主導で棚田保全に取り組んでおられ、さまざまな活動が活発に行われていることに感心した。しかし、「これから誰が耕すのか」という問題はここにもある。先祖からの耕地を守るためにという心を持った方はいつまでも生きてはいない。美しい棚田を眺めるのはいいものだが、何もできない情けなさを感じる。

1. 信頼関係で行われる田んぼの水の管理

～北庄の棚田・水利組合～（神田竜也さんの発表から）

水利組合の会員全員で全員の田の水の世話をするというしぐみに驚いた。水の当番は、他の人の田の水も入れ調節する仕事をする。どの田がどんな性質でどれぐらい水が要るのかを知っていなければできず、任せる方も信頼していなければ任せられない。「水争い」の話は全国に語り継がれるところだが、ここでは地域が信頼関係で結ばれていることが分かる。視察当日はちょうど水利組合の総会の日だった。総会後はやはり飲み会があり、結束を強めている。一つの目的で結ばれあって地域のつながりが保たれるという伝統の形に注目した。

2. 都市住民を取り込み、地域を元気づける

～北庄の棚田保全活動～（西河明夫さんの発表および現地見学から）

棚田見物人→イベント参加者（棚田ファンクラブ）→保全協力者（棚田支援隊）→棚田米生産者（天コシクラブ）と段階的に都市住民を取り込む方法がよくできていると感じる。西河さんの頑張りで行われている活動。西河さんは会社勤めもされているということで、よくそれだけのバイタリティーがあるものだと感心する。ため池を見下ろす棚田は円形劇場のようだと感じた。都市住民が草刈りをしている場所はかなり広がった。

3. センブリを指標植物に、耕す人の願いを尊重

～大井和の棚田保全について～（飯山直樹さんの発表から）

「生態学+景観+棚田保全」の考え方に目からウロコの部分が多かった。そこに暮らし働く人の願いと、ヨソモノのできることを合わせて、行動に結びつけるための理論だった。「頑張ろう」という精神だけでは続けられない。草刈りの目標を示すための植物（例えばセンブリ）を設定する、草刈りにかかる工数を計算し、何人が何時間かかわれば維持できるかを算出するなど、実際的なアイデアがいい。また、目標

を設定するのに、「有識者の意見」ではなく、地域の人の願いを無視しないこと、暮らしの実態に合ったものにするのを重視していることがすばらしいと感じた。

地域住民のアンケート結果。棚田耕作を続けることで期待する機能①先祖からの土地を守る②健康増進③環境によい④景観を美しくする⑤食糧生産にショックを受けた。田んぼとは食べるためのお米を作るところではなかったのか。それが第5位とは。農が業になっていない現実が現れている。

4. 先祖から受け継ぐ田んぼを大切にしたい

～大井和の西の棚田見学～

屋敷周りに、利用できる果樹、樹木が植えられ、家族をまかなう野菜畑があり、きれいな花が咲き乱れている。ここにも食べものを自分で作って土地とともに一生懸命暮らしている人がいる。私の住む地方と比べ、大きな田んぼが多い。歩きながら棚田保存会長の溝口さんの話を聞く。今一番問題なのは跡継ぎのこと。跡継ぎが決まっている家は少ないという。「先祖からの土地を荒らしたくないから耕作している。ヨソモノでもいいので、後を継いでやってくれる人があれば喜んでやってもらおう」と溝口さんは言う。

大学生たちは「のどかだなあ～」と口々に言っていた。そこには、そこで暮らすことはあり得ないというニュアンスが漂っていた。「やっぱりそうなのか」と少々ショック。都市で生まれ都市で暮らす人にとって、山里暮らしははまだ「別世界」に映っている。山里の高齢者が年金をつぎ込んで日本の食糧を生産しているということを、一人でも多くの人に知ってもらわなければならない。「私食べる人、あなた作る人」の構造がいつまでも続くとは限らない。

2日間、とても充実した研究会で満足。企画運営に当たってくださった皆様、ありがとうございます。また参加したいと思います。



大井和の西の棚田。広い田が多い。  
(撮影：清藤奈津子)



## 第20回現地見学会・研究会 「岡山県吉備高原の棚田」に参加して(2)

山口県光市 守末 道代

去る5月5・16の両日、恒例の現地見学会・研究会が岡山大学津島北キャンパス等で開催されました。参加者の中には、早稲田大学・海老澤研究室の学生さんたちもいて、華やいだ会となりました。

### = 研究会 =

始めに、中島会長より「今回は地域地理学会との共催、当会は、年二回の開催で第20回目となる。ご当地は日本棚田分布図作成からみて、新潟に次いで2番目に棚田が集中し、棚田整備事業の先駆けで取り組まれた吉備の地での開催となった。」との紹介がありました。

#### ☆発表1 「久米南町北庄の農業用のため池・水路と棚田」：神岡竜也氏（岡山大学）

北庄における一大事業は、1925年耕地整備組合の設立、事業費1,001,090円でため池の新設10基・増改築11基、サイフォン34カ所、隧道14カ所、道路約30kmの新設と改良、開田14haであった。現在、6つの水利組合が存在し、水番とツク番のいずれかの制度の下で水管理が行われ、組織体制の内部機能等は時代の変化とともに、少なからず変更が加えられているとのことでした。

これら、伝統文化を、地域連携によって学校教育に活かされており、小学校では、2,000年代に入り生物調査や水利学習などのメニューが拡充され、新しい地域資源活用プログラムを構築されたようです。

#### ☆発表2 「今摺米」による棚田保全：西河明夫氏（北庄中央棚田天然米生産組合長）

平成6年 棚田天然米産地育成事業に取り組むために発足し、都市との交流で「苦農」から「楽農」を目指された。棚田での農業の立地は、「今摺米」へのこだわりを繋ぐネットワークづくりが欠かせない。それは、①地元活動組織活動があり、②ブランド化と販路確保の支援組織の存在、③労働力で支援する組織、④活性化を支援する地域外からの支援、⑤地域内活性化支援組織の存在であること。それぞれの役割を明確にして、「楽農」の実現に取り組まれました。

#### ☆発表3 「大坪和の棚田での景観の入った生態学」：飯山直樹氏（㈱エコ建設コンサルタント）

ここは棚田百選に数えられる地区で、植生の変化や農業体系の変化によって、棚田景観が変化してきたと考えられ、このような変化をふまえて、景観や生態系をこれからどのように活用できるか考えてい

きたいとのこと。私の体験では、自分で管理し始め9年目を迎え、休耕田であった田や畦、法面の草勢が変わってきました。花木や山野草らしい姿が見えると、その周辺を丁寧に草刈りし、成長を助けるようにしたことで、法面のツツジが大きくなり花を咲かせ、「ナデシコ・リンドウ」の株も数が増えてきました。山奥の棚田は彩り豊か？になりつつあります。研究テーマとの関係は・・・???

### = 現地見学会 =

#### ☆久米南町北庄棚田：案内人 西河明夫氏（棚田天然米生産組合組合長）

研究会で紹介された棚田、地域の主要生活道は棚田の最上部にあり、眼下に棚田が広がっていました。日本一の棚田面積があるとのことでしたが、エリアの中に山やため池があり、美しい景観を見ることができました。サイフォンで送られてくる水は大切に、畦塗りや石垣下の溝をしっかりと形づくり、水の保持やスムーズな流れへの管理が行き届いていました。

#### ☆美咲町大坪和西棚田：案内人 見手倉観治（美咲町棚田保存地区連絡協議会顧問） 溝口清志（同会長）

当地は、標高400m以上、42haに850枚の田が鎮座し、雄大な景観となっていました。棚田百選に選ばれ、他の棚田地区7カ所とともに町域協議会を立ち上げ、棚田米は「卵かけご飯」用に、ソバは「紅そば亭」に提供され、多くのお客を呼び込まれていました。棚田をめぐる道は高手にあり、絶景ポイントの地図マップを見ながら見学でき、多くのファン方がいます。

#### ☆昼食は 美咲町「紅そば亭」で

美咲町の中央部に位置し、唯一、営農活動に取り組んでいる棚田地区でした。昼食には「かけそば」「5種類の天ぷら」「赤米むすび」をいただきました。ここでは、6人の女性たちが中心となって取り組まれていました。私にとっては、ここが一番参考にしたところだったかも？



研究会での発表者  
(左から飯山さん、西河さん、神田さん)

## 心のふるさと 棚田里山展

棚田学会副会長  
新生ふるきやら代表 石塚 克彦

日時 8月4日(水)～8日(日)  
会場 池袋・西武デパート催物会場  
主催 棚田学会・新生ふるきやら  
NPO 法人棚田ネットワーク

棚田学会は学者、研究者だけではなく、棚田を耕作している農業者、写真家、画家、歌人、演劇人、文筆家、行政の人など幅広い会員を有する学際的というよりもっと広がりのある組織です。

巾広いチームだからつくることの出来る棚田のイベントを、親子で体験できる夏休み中に都会のド真ん中で、再度実現すべく企画しました。

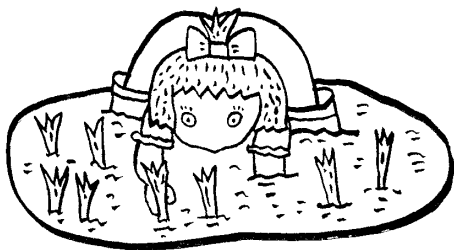
生物多様性の保護のための国際会議 (COP10) が名古屋で開かれる今年、自然と人間の共生のシンボルでもあり、森と水場が隣接する棚田を、生産の現場としてだけではなく、すぐれたジオトープとして知ってもらおう機会でもあります。

また、ほんとうの意味で、自然と人間がかかわって生きてきた日本の生活文化を感じさせてくれる景観を探そうとするなら、いまや棚田地域にしか残っていないと言っても過言ではありません。その大切さを重視した文化庁も、残すべき重要文化的景観として多くの棚田を位置づけ、指定を始めました。

しかし重要文化的景観については、まだまだ広く知られてはおりません。今回の棚田展では広く宣伝することも目的の一つです。

棚田は、大都会より遠く離れた山間部に多くつくられております。ですから都会のド真ん中で、都会にくらす人々に棚田を体感してもらう展示イベントは、棚田保全活動にとっても意味のあることだとの想いで企画しました。

成功させるための協力をお願いいたします



### 展示内容の企画

#### コルトンを中心とした棚田の展示

棚田展示の目玉は、実際の棚田の前に立ったような臨場感で迫ってくる大型コルトンです。地方によって違う、棚田への水の導き方の工夫、その知恵や面白さ、その特徴を迫力いっぱい展示したいと考えています。

#### アジアの棚田と文化

棚田は、アジアモンスーン地帯の山岳部に数多く存在します。そのいくつかと棚田を耕す人々の文化の一端を紹介します。

#### 日本の棚田大型分布図

日本の棚田分布図は 15 年前、棚田学会長の中島峰広さんによって初めて作られました。今回は地方の棚田の特徴を示す写真をちりばめながら大型分布図を製作する予定です。

#### 田の神様とホタル

田んぼの豊作を願って、「田の神様」を祭る風習が日本各地にあります。中には可愛い神様もあります。また、田んぼに「ホタル」はつきものです。都会のまん中にホタルの舞う空間をつくり、夏休みの都会の親子に見せたいと思っています。

#### 里の森みらいの紹介

現在、農村の暮らしに必要とされなくなった里山は放置され荒廃していますが、その里山を復活させ、茸や山菜の生産現場（職場）として手入れを始めた人たちがいます。新しい山村再生をめざす珍しいとりくみで、何とか紹介したいと考えております。

#### ペープサート・エコミュージカルの上演

展示会場内に特設ステージをつくり、そこでペープサート（大型紙芝居）を組みこんだプチミュージカルを上演します。“新生ふるきやら”による荒廃した山里の再生と地球温暖化がテーマの「ホープ・ランド」をアレンジしたプチミュージカルです。

この他、今や棚田を撮る写真家としてクローズアップされている棚田学会写真部のリーダー永田博義の棚田写真展や、企業による棚田や山村保全協力の紹介、棚田検定、夏休み向け子供の勉強コーナーなど盛りこみ、子供から大人まで都会にくらす人々に、インパクトあるイベントを贈りたいと考えています。

## 日本の棚田百選紹介

### 岡山県久米南町の「北庄の棚田」

岡山県久米南町

北庄中央棚田天然米生産組合組合長 西河 明夫

岡山県内には、4箇所棚田百選に選ばれた地区があります。そして、その全てが久米郡内にあり、更に、北庄（きたしょう）棚田を含め久米南町に2箇所、美咲町に2箇所となっています。北庄棚田が選定された地区は、北庄東・北庄中央・北庄西の三地区からなり、地区全体が棚田百選に認定されている為、棚田枚数2700枚、面積88㌔と『日本一の面積』を有する棚田として紹介されています。久米南町は、JR津山線を利用すると岡山駅より約60分、自動車利用の場合は、中国自動車道津山インターチェンジより約30分、山陽自動車岡山インターチェンジより約50分、岡山空港より車で約40分、岡山県の中央部付近に位置します。

北庄棚田は、標高250mから450mの間に幾何学模様が幾重に重なった光景は、まさに、『耕して天に至る』の言葉通りです。

北庄地区は、古くには江戸時代初期、農事改良家が大庄屋の『河原善右衛門』築堤とされる『是里池』、大正12年頃の大干魃と『福田久治』設立の『誕生寺耕地整理組合』により築堤された数多くの『溜池』と開田に、支えられ中山間地域にありながら、干魃（かんばつ）による「大きな被害」を被ることも無く、現在も稲作が行われています。その偉業の中でも、今年溜池百選に選定された『神之淵池』の農業用水を地区内にある『神谷』と呼ばれる谷底を通して向かいの地区に通水する仕組みは現在も活躍し、多くの棚田を潤している。

北庄棚田は、三地区より構成されている為、日本一の面積を有する棚田を一望出来る場所はありませんが、特に効果的に景観を見る事が出来る場所は、北庄中央・西の谷地区の棚田百選の看板を設置した場所。時間帯は、日没時の夕景以外はOK。特に、朝陽・朝霧、そして、5月の田毎の月は幻想的である。季節については、特に推薦する季節はない。冬は、雪景色と日の出。春は、棚田に咲く梅・桜と朝霧、初夏は田毎の月とレンゲ、夏は棚田の緑、秋は彼岸花・そばの花そして紅葉と四季を通して、癒しの風景を提供します。

当地区へは、国道53号線分岐（国道に北庄棚田の看板あり）より、北庄棚田への案内看板をたどりに車を進めると約3kmで棚田百選の看板の立つ西の谷地区に到達することが出来ます。

北庄棚田の原風景の維持と地域活性化を率先して活動している団体として『北庄中央棚田天然米生産組合』があります。当組合は平成6年に組織され、組合内では組合員が協力し、昔ながらの櫛干し（はぜ干し）による乾燥と有機減農薬を栽培条件とした『今摺り米（特別栽培米のコシヒカリ）』を作付けし、道の駅の直販所での限定販売と米問屋への直販を行っています。安全・安心指向の消費者ニーズにマッチし、昨今では8月初旬で完売となる迄、ブランド米としての地位を得る所までに至っている。

町外者に対しては、棚田ファンクラブを設立し、組合が開催する『棚田まつり（3月）』・『収穫感謝祭（11月）』や、稲作を通して地区内に伝わる伝統行事（秋季大祭・虚空蔵院菩薩縁日・護法祭等）地域文化への触れ合いをPRしている。

日本中の中山間地域が直面している高齢化による耕作放棄地の拡大の波が、北庄棚田にも押し寄せ、来訪者の方に癒しを与える風景の崩壊に危惧し、平成19年より北庄中央棚田天然米生産組合が中心となり、地区住民と棚田支援隊の方々の積極的な協力による、約1㌔の棚田再生の実績は、新たな棚田地区の問題解決の糸口となる活動と考えます。

又、昨年より発生した耕作放棄地の再生に加え、新たな耕作放棄地の発生を抑制する事を目的とし、都市住民の方に自分達の手で栽培した安全・安心の米作りに参加して頂く『天コシクラブ』の活動を開始しました。地元住民のふる里を愛する気持ちと熱意に都市住民の方々の立場、立場（棚田ファンクラブ・棚田支援隊・天コシクラブ等）の協力を加えた協働で、当地を訪れて頂いた方々に、癒しを与える事の出来る棚田景観を維持する事の痛感しているところです。



北庄の棚田で田植え



## 官庁ニュース

### 新たな「食料・農業・農村基本計画」について

(独) 国際農林水産業研究センター (JIRCAS)  
研究戦略調査室 山岡 和純

食料自給率を平成 20 年度の 41% から平成 32 年度を目標に 50% (供給熱量ベース) に引き上げるなどの意欲的な目標を掲げた新たな食料・農業・農村基本計画 (以後、「基本計画」と呼ぶ) が、去る 3 月 30 日に閣議決定されました。この計画は、食料・農業・農村に関して政府が中長期的に取り組むべき方針を定めたもので、内外の情勢変化等を踏まえ、食料・農業・農村基本法に基づいて概ね 5 年ごとに更新されるものです。

現代社会では経済のグローバル化が急速に進んでいます。これに伴い私たちは、これまでになかった世界経済システムの脆弱性を経験させられました。米国のサブプライムローンがもたらしたリーマンショックは、ある国の一つの経済システムへの信用・信頼の揺らぎの影響が、急速に世界規模に波及する恐ろしさを教えてくれました。また、主要穀物の不作などをきっかけに需給の逼迫感が急速に高まり、小麦、大豆、米などの国際市場での穀物価格が軒並み高騰したという経験も、まだ記憶に新しいところです。

人間にとって共通の必需品である食料の生産は、工業製品の生産とは異なり、天候や病虫害など、様々な自然現象の影響を受けやすく、さらに発展途上国での旺盛な食料の需要の増大に対して、その生産・供給には土地や水などの限りある資源の持続的な投入が必要です。このため、地球規模での食料需給バランスを考えると、将来にわたって楽観できる状況にはないことは明らかです。地球温暖化の食料生産への影響も不安定要因のひとつです。バイオ燃料の普及はエネルギー生産部門が限りある土地・水資源を奪うという形で食料生産に影響を及ぼします。

今後、世界の穀物等の需給は逼迫した状態が継続し、食料価格は高い水準を保ちつつ上昇傾向で推移するとも予測されており、一部の食料輸入国や多国籍企業が世界各地の農地に投資し、食料生産の囲い込みを進める動きもみられています。こうしたことから国民の間では、現代社会において食料の自給が国の安全保障の要であるという認識がますます高まっています。

基本計画に示された食料自給率 50% 達成のイメージは、平成 19 年度の食料自給率 40% に、①米の消費拡大で 1.3%、②米粉の生産拡大で 1.4%、③裏作小麦の生産拡大で 2.5%、④大豆の生産拡大で 1.0%、

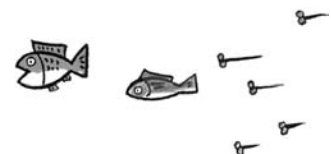
⑤牛乳・乳製品の生産拡大で 1.5%、⑥その他野菜・イモ類・果実の生産拡大で 2.0%、⑦油脂の消費抑制で 0.3%、の合計 10% を上乗せするものです。このために必要な未利用地を有効活用する面積を、①耕作放棄地からの営農再開が概ね 10 万 ha、②調整水田・地力増進作物作付地への新規需要米等の作付けが 20 万 ha、③水田裏作における麦類の作付けが 36 万 ha (現行 5 万 ha)、と見積もっています。

さらに基本計画は、基幹的農業従事者の平均年齢が 65 歳を超えるなど過疎化・高齢化が進む現代の農村において、食料自給率目標の達成のため、現存する土地・水資源や高度な農業技術、人的資源をフルに活用し、農業者、食品産業従事者、消費者等すべての関係者が最大限努力することを求めています。

なお、野菜、果実や畜産物等の生産活動をより適切に反映すると言われている生産額ベースの総合食料自給率は、平成 20 年度の 65% を 70% まで引き上げること、飼料用穀物や牧草を可消化養分総量 (TND) に換算した飼料自給率は、同じく 26% を 38% に引き上げることを目指しています。

このほか基本計画では、①水田農業を対象に米、麦、大豆、米粉用米、飼料用米等の戦略作物を生産する農家に対してモデル的に戸別所得補償制度を導入し、さらにこの制度を他の作物に導入するための制度設計を行う、②地産地消を推進するとともに生産から流通・消費に至る一連のフードチェーンにおけるトレーサビリティ・システムや危害分析・重要管理点 (HACCP)、農業生産工程管理 (GAP) の定着を実現する、③農山漁村の多様な事業者が再生可能エネルギー、経験・知恵・伝統文化などのあらゆる資源を活用する事業を含めた新しいビジネスに取り組めるよう支援して農山漁村の 6 次産業化を実現する、ことを政策の 3 本の柱に掲げています。

ところで、この基本計画を受けて、新たな農林水産政策に即した革新的な研究開発を効率的に進めるため、同じ日に新たな農林水産研究基本計画が決定されました。これは平成 17 年に決定された計画を 5 年ぶりに改定するもので、農林水産業・農山漁村の持てる機能を最大限に活用するため、産学官の各部門が共通の基本的な方針の下に新たな知識体系を構築することを目指しています。そして対象とする農林水産研究を、①食料安定供給研究、②地球規模課題対応研究、③新需要創出研究、④地域資源活用研究、⑤シーズ創出研究、の 5 つの領域に分け、今後 10 年程度を見通した研究開発の重点目標と、これらの 5 年後までの主要な研究達成目標を策定しています。



## 書籍紹介

宇根 豊 著・築地書館 出版

### 「風景は百姓仕事がつくる」

2010年3月刊

四六判並製 312頁 1890円(税込)

安井 一臣(棚田学会理事)

著者・宇根豊氏は、田んぼに関係する数多の昆虫の中で、害虫でも益虫でもない「ただの虫」の重要性を世に知らしめた碩学である。また、「百姓仕事は自然をつくる(2001 築地書房)」で、農山村地域では当たり前の「ただの風景(ありふれた農の風景)」の社会的価値を世に問うた。本書はその続編と位置付けられ、「ただの風景」について、より論考を深めた名著といえる。著者は本書で、景観とはそれを見る人に共通する「画面構成」であり、そこに自分の思いや記憶、経験などを投影すると風景が出現すると定義し、景観と風景を明確に区別している。さらに、私たちが普通に使う「農家」「農作業」という言葉を、著者は大きなこだわりを持って「百姓」「百姓仕事」と呼ぶ。

百姓仕事は目的とする農業生産以外に、多くの自然の恵みを引き出す。この恵みを一般に「農林業の多面的機能」という。百姓仕事はこの恵みを引き出すと同時に、この恵みによって支えられている。この恵みは「ただの風景」という概念に集約できるように思える。著者は「農業生産とは、百姓が自然に働きかけ、それに応じて自然からもたらされている“すべての恵み”を指す」と述べ、この自然は社会全体で守るべき共有財産と主張する。同時に著者は「ただの風景」の永続性も指摘している。例えば、「棚田を開いた人は、百年後も、二百年後も耕し続けられることを疑わなかっただろう。自分の代だけなら、苦勞して田んぼを開く意味は小さく、現代風に考えるなら、自分の代では元はとれない。だが、自分の死後も田植えや稲刈りが続くと思うと、畔の石を積んでいく仕事も楽しかったろう」と思い巡らしている。また、四季の繰り返しの大切さも述べている。

「形見とて何か残さん 春は花 山ほととぎす秋はもみじ葉(良寛の辞世の歌)」を引用して、自分が死んでも、繰り返す四季を残すことができたなら、何の心残りがあろうか、という思いを読者に訴える。いろいろと考えさせられる書である。



「風景は百姓仕事がつくる」の表紙

## 事務局ニュース

### ■ 2010年度棚田学会大会

大会及びシンポジウムの以下の通り行います。

日時：2010年8月1日(日) AM11時～

会場：三越劇場(東京日本橋三越本店6階)

◆平成21年度棚田学会総会 11:00～11:50

◆棚田学会賞授与式 13:00～13:40

◆シンポジウム「棚田の圃場整備」14:00～17:45

◇報告者(パネラー)

報告①「棚田の労働生産性」

亀井雅浩氏(近畿中国農研)

報告②「棚田の圃場整備」

内川義行氏(信州大学)

報告③「棚田の圃場整備と景観」

重岡 徹氏(農工研)

◇パネルディスカッション

パネラー：亀井雅浩氏・内川義行氏・重岡徹氏

山岡和純氏(JIRCAS)・高木徳郎氏

コーディネーター：山路永司氏

(棚田学会理事・東京大学大学院 新領域創成科学研究科教授)

◆懇親会 18:00～20:00

特別食堂「不二の間」日本橋三越本店7階

### ■棚田検定のお知らせ

この8月よりWebで棚田検定が始まります。

□主催 棚田学会

□運営協力 株式会社ビジョンプラス

NPO法人 夢中塾

□受験方法

Webで検定します。受験者が棚田学会ホーム



ページ (URL: <http://www.tanadagakakai.com/>) から『棚田検定』にアクセス⇒受験申し込み⇒クレジットカードにて受験料決済 (コンビニ決済可能) ⇒インターネット上で解答⇒送信⇒可否自動判定⇒合格者に合格証発行

□内 容

- ・ 学士コース・修士コース・博士コースの3コースです。
- ・ 上位コースを受験するには下位コースの合格が必要です。
- ・ 各コース合格者にそれぞれの特典があります。

□受 験 料 各コース 2000 円 (税別)

□開始時期 (予定)

- ・ 学士コース 9 月
- ・ 修士コース 10 月
- ・ 博士コース 2011 年 1 月

□問 題 数 各コース 30 問 (シャッフル方式)

□合格水準 各コースとも 60 点以上

□検定時間 30 問を解くのに 1 時間



棚田検定のトップページ (予定)

■棚田学会事務局住所の変更について

棚田学会の事務局を置く劇団ふるさときゃらばんが2月8日自己破産したため、事務所の所在地の移転を検討する臨時理事会を開催した。結果、千賀研究室 (東京都府中市幸町 3-5-8 東京農工大学農学部地域生態システム) を事務局とすることを決定。事務局担当は引き続き高橋が行うが、問い合わせは基本的にはメールとし、事務局 (千賀研究室) への電話、郵便物等の対応は、研究室に籍を置く今井英輔理事が行うことしました。

新住所は下記の通りです。

棚田学会事務局 (担当・高橋、今井)

〒 183-8509 東京都府中市幸町 3-5-8

東京農工大学農学部地域生態システム学科千賀研究室

TEL : 090-4817-1083 (高橋携帯)

TEL:042-367-5758(今井) FAX: 042-336-1299

E-mail : [tanadagattukai@yahoo.co.jp](mailto:tanadagattukai@yahoo.co.jp)

■棚田学会賞基金

棚田学会賞基金を受け付けております。

宜しく御願ひ申し上げます。

1. 募 金 額 1 口 5,000 円 (1 口以上)

2. 募金方法 郵便振替用紙に「棚田学会賞基金」とご記入の上ご送金下さい。

3. 口座番号 00150-2-125247

棚田学会

■酒井英次絵画展

棚田学会会員の酒井英次氏の棚田等の絵画展です。

第 8 回酒井英次絵画展「民族の風景 40 年の 40 点」

日程 : 6 月 30 日 (水) ~ 7 月 4 日 (日)

場所 : 新潟市美術館展示室Ⅲ

■編集後記

近年、文化的景観として棚田が認識されるようになってきた。世界遺産条約の実務を担うユネスコでは、Cultural Landscape (文化的景観) は “combined works of nature and of man (人間の営為と自然との結合の所産)” と定義される。自然的な条件や制約を読み解いて、農の営みを展開してきた各地の棚田に相応しい考え方である。この「文化的」の名詞形 “culture” は、もちろん「文化」の意だが、辞書で引くと最後のほうに「栽培・養殖」ともある。野生の状態ではなく、人間の管理下での生産あるいは生命保持といったものか。いってみれば、自然を人間の都合のよい状態に飼い馴らした土地が文化的景観となる。天然ものに対し、栽培品や養殖ものは格下と思われているきらいもあるが、そもそも自然を耕し馴化させつつ活動領域を広げてきたのが人類の歴史である。むしろ、その際の自然への接し方や姿勢こそ「文化的」の内実であり、人の営為が加味され初めて得られる新たな価値と私は考えている。そして我々が棚田には、持続的に土地を保つための思想と営みが詰まっているのである。今、我々の「文化の水準」が問われている。

(日本大学 : 大澤啓志)

## 棚田写真集

### 静岡県松崎町の「石部の棚田」



富士山が見える棚田です。  
サミットでお会いしましょう。

### 岡山県久米南町の「北庄の棚田」



田植え間近、朝霧が沸きます。



夕日が駿河湾に沈みます。  
(松崎町役場提供)



秋は黄金色に色づきます。  
(北庄中央棚田天然米生産組合提供)

### 兵庫県多可町の「岩座神の棚田」



兵庫県多可町には、西日本一の石垣美を誇る  
岩座神の棚田があります。  
(多可町役場提供)

### 岡山県美咲町の「大楯和西棚田」



第20回現地見学会では、すり鉢状の「大楯和西棚田」  
をウォーキングで一周しました。  
(美咲町役場提供)